

「測评分科会」から「測評学会」へ

—測定評価分科会小史—

Transfiguration of the Test and Evaluation Division (TED) into Japanese Society of Test and Measurement in Health and Physical Education: a historical sketch of TED of Japan Society of Physical Education

波多野 義郎¹⁾

Yoshiro HATANO¹

Abstract

The founding general assembly of the Test and Evaluation Division (TED) of the Japan Society of Physical Education (JSPE) was held on May 23, 1964 at Meiji University at the occasion of the 15th JSPE Conference. Prof. Tamakazu Takenaka of Yokohama National University was named as the chair of the governing board, while Tokyo Metropolitan University physical education staff, such as Dr. Tetsuo Meshizuka, Yoshimasa Iwasaki and Akira Nagata organized the TED office, mainly involving publication of the society journal "Circular".

Issue No.61 of Circular was published in December 2000 carrying 28 original research articles, by when TED membership had grown to more than 420. Thus the organization decided to evolve into a new academic organization, the Japan Society of Test and Evaluation in Physical Education and Sports (JSTEPES), thus no longer being a sub-organization of JSPE. The founding general assembly of JSTEPES was held on November 23, 2001 at Juntendo University Hongo Campus, the current author becoming the founding president, with Prof. Hiroshi Yoshigi of Juntendo University as chairperson of the board and Ms. Ayako Ohta of Musashigaoka College as secretary general.

This report outlines the history of TED, introducing the contents of the Circular magazine from over time such as the major academic interests of the active leaders, the transition of chair of the governing board, and the TED business office during the 37-year history of the organization. A future vision of the newly established JSTEPES is contemplated.

1. はじめに

日本体育測定評価学会（測評学会）第1回大会は2001年11月23日（金・祝）順天堂大学本郷キャンパス有山記念館において、設立総会、16演題の研究発表、記念講演、シンポジウム「測定評価研究の行方を探る」等の行事を含めて盛大に開催された。この学会は日本体育学会測定評価専門分科会（測评分科会）を母体として、学会に移行したもので、学会活動の実質は既に測评分科

会において蓄積されてきたものである。そこで本稿では測评分科会の誕生から、測評学会への移行に至る37年間の歩みを、主として世話人代表・事務局の推移、機関誌サーキュラーの動向を概観しながら、測评分科会小史として纏めようとするものである。この内容の主要部分は、前述の（学会設立）記念講演において準備・発表されたものであるが、1964年から67年当時の資料（サーキュラー）については、岩崎義正会員（新学会監事）の協力を得たことを感謝とともに付記する。

1) 九州保健福祉大学 *Kyushu University of Health and Welfare*

2. 測评分科会が発足し活動が軌道に乗る (1964 - 65)

1964年2月19日に開催された日本体育学会常任理事会では、かねてより申請書が提出されていた測定評価専門分科会の設置について承認決議を行い、これにより「測评分科会」が誕生することになった。折から東京オリンピック大会の開催を8ヶ月後に控え、またオリンピックにちなんで文部省によるスポーツテストが制定される頃でもあって、体育測定評価に対する関心が高まり、その領域に関する学問的研究が盛んに行われようとしていた頃である。発足に際しての世話人代表は竹中玉一（横浜国大）〈敬称略、以下全て、乞ご理解〉、他に世話人として萩原 仁（広島大）、石河利寛（東大）、松田岩男（教育大）、飯塚鉄雄（都立大）、水野忠文（東大）、野口義之（文部省）、佐々木 茂（天理大）他6名が名を連ねていた。発想の原点としては米国の体育学研究において常に検査測定及び評価について合理的・科学的検討が行われていることを受けて、日本の体育学研究において同様な領域の独自性を主張しその研究活動を賦活したい、と言うことであった。事務局は都立大に置き、機関誌（原則として隔月刊のニュースレター）サーキュラー（この名称になるには日丸哲也の意見が大きかったとされる）を刊行することとなり1964年4月にその第1号がガリ版刷りで発行された。

同年8月発行のサーキュラー第2号によると、分科会第1回総会が1964年5月23日に明治大学で開催され、規約・運営方針・機関誌（隔月発行）・研究活動の進め方・学会大会の分科会シンポジウムテーマ（体育におけるテストの検討）等が審議された。またこの総会において分科会名称・機関誌名について討論の結果、両方とも「当分現状で行く」とされた。「当分」と言いつつ結局37年が過ぎた訳である。

次の年には月例研究会が誕生した。その第1回研究会（例会）は1965年3月18日に開催され田中政次（学習院高）が「学習院高等科および大学における実技評価について」と言うテーマで発表、次いで4月21日例会では石田俊丸（東工大）が「握力の測定は信頼できるか」、5月28日例会では田所勝太郎（青学大）「スキーの体力測定項目について」と続き、7月5日例会では当時少しずつ発達し始めていた「電算機講習」が人気を集め、その後10月吉田健一（國學院大）「昔の日本人の体力基準について」、1966年1月、野口義之「スポーツテストのサブテスト間の相関について」と発表が続いた。研究発

表と討論による相互の研鑽という分科会の活動リズムは既にこの当時に確立されたものであり、現在までそれが継承されていることに深い感慨を覚えるものである。顔ぶれは替われど研究への情熱とエネルギーは偉大な先人たちといささかも変わらないと言う見事な法則を見出す思いがする。

1965年8月に日本体育学会第16回大会が北大で開催された。その時の総会で世話人代表の交代が認められ、後に佐々木 茂（天理大から間もなく学芸大へ移動）が指名された。なお学会大会シンポジウムのテーマは「体育における学習結果の評価は如何にあるべきか」、そして事務局は引き続き都立大（庶務担当：日丸哲也・永田晟）が引き受けた。

1965年度総会における議論を経て、同年9月physical fitness testに関する内外の文献研究が始まった。このプロジェクトはその後数年間に涉って展開された。また1966年2月の月例研究会で石田俊丸が発表した「新しい垂直跳び測定器」はその後「ベルト・紐式」として広く愛用された。その頃のサーキュラーから月例会の話題を探ると、和泉貞夫（東女体大）「女性美の評価」、石崎龍雄「自衛隊の体力測定とその問題点」（1966.7, サーキュラー 7）、唐津邦利（都立大）「J. S. テストのノルムについて」（1966.11, サーキュラー 11）、桐生武夫（東工大）「勤労者の体力について」（1967.1, サーキュラー 12）、小川義雄（横浜市大）「体力問題に対する一考察」、波多野義郎（学芸大、同年11月までは非常勤）「最近の米国における体育測定」（1967.8, サーキュラー 14）などとなっている。

当時事務局を預かっていた都立大では、飯塚鉄雄が米国アイオワ大学で測定評価学界の孤高の巨人であったマックロイ博士から学位（Ph.D.）を取得して帰国（1956

表1 歴代世話人代表

竹中 玉一	（横浜国大：1964-65）
佐々木 茂	（学芸大：1965-72）
小川 義雄	（横浜市大：1972-74）
飯塚 鉄雄	（都立大：1974-76）
石田 俊丸	（東工大：1976-78）
角田 泰造	（女子美大：1978-80）
和泉 貞男	（東女体大：1980-82）
栗本 関夫	（順天堂大：1982-84）
波多野義郎	（学芸大：1984-88）
青山 昌二	（東大駒場：1988-90）
田中 政次	（学習院高：1990-92）
服部 利夫	（国土館大：1992-96）
吉儀 宏	（順天堂大：1996-00）
小清水英司	（東薬大：2000-）

年)し、身体適性学講座を率いて活躍していた。次に栗本関夫が体育測定評価の分野で当時の第一人者クラーク博士のもとでPh.D.を取得、1965年に帰国して順天堂大学に勤めていた。私(波多野)はこのような先人の後を受けて1967年3月に帰国したところだったので、上記の発表となったものである。

発足期のガリ版刷りサーキュラーの様子を偲ぶために、4、13の表紙をコピーして掲げる。

3. 事務局が学芸大に移動 (1967 - 72)

1967年11月に日本体育学会第18回大会が大阪で行われ、その時のシンポジウムテーマは「体力の要因とテスト項目について」であった。発表者は飯塚、佐々木、小川、中山仁(新潟大)等であった。この時に事務局が学芸大に移転すると決まり、佐々木世話人代表のもと、羽鳥・波多野の事務局担当で1972年までが過ぎること

昭和40年5月25日発行



体育測定評価専門分科会々報

事務局 東京都目黒区八雲1-1-1 TEL EXT 259
東京都立大学体育学教室 (117)0111

CIRCULAR

MAY. 1965 NO. 4

オ16回日本体育学会 シンポジウムについて

—— テーマ選定までの経過 ——

一月中旬頃シンポジウム選定に関する意見を各会員にお伺いしたところ、評価に関する事項が過半数でありました。一月二十三日、東京地区の研究会で、次のような研究討議をいたしました。主題を、体育測定評価の現状とその問題点として、評価について分析的に継続研究としていこうということに於て研究小委員会を設置しました。

① 総合体力テスト ② 適性テスト ③ 技能テスト ④ 教科テスト ⑤ 教材の評価 ⑥ 評価の精度 ⑦ 評価はどうあるべきか

二月五日には、シンポジウムについて、各専門分科会の代表による打合せ会が開かれ、関連した分科会が共同主催の形で進め、各分野から問題点を提案し、討論することになった。次のように決定し、承認されました。

- ① 体育史専門分科会 体育原理専門分科会
- ② 運動生理専門分科会 発育発達専門分科会
- ③ 体育心理専門分科会 キネシオロジー専門分科会
- ④ 運動管理専門分科会 保健グループ
- ⑤ 体育測定評価専門分科会

※ 舞踊の体育的意義(特別シンポジウム)
当分科会の討論の主題は、現行の学校体育における体育


各校と評価する場合、指導要録によると「習慣・態度・技能・理解・運動参加」等の評価項目が設定されているが、それはどのような意義を持ち、どうあるべきか、生理・心理・管理の分科会の代表から問題点を提案してもらって、当分科会でまとめを総括して、討論することになっています。目下学校体育評価の現状と問題点を把握するため実態調査をすることになっておりますので、会員の御協力を願います。

◎ 会員名簿についてのお願い ◎

おくみせながら名簿が出来ました。会員名簿作成にあたって、事務局では既に会費の納入済みの方および事務局に何等かの形で連絡のあった方を掲載したつもりですが、なかには名簿にもれた方があるかも知れません。又、誤字・脱字、あるいは住所の変更等がありましたら、お手数ですがお知らせ下さい。

専門分科会月例研究会誕生!

当専門分科会の集まりが一月二十三日、東京都立大学の会議室で行われ、東京近郊に在住する者を中心として対象とした月例研究会と持つことが決められ、オ16回(三月十八日)学習院大学において、田中政次氏より「学習院高等科および大学における実技評価について」と題する研究発表があり、熱心に研究討議がなされた。オ16回(四月二十一日)東京工業大学において、石田俊九氏による「握力の測定は信頼できるか」と題して研究発表が



体育測定評価専門分科会会報

◀事務局▶ 東京都目黒区八雲1-1-1 TEL 717-0111
東京都立大学体育学教室 (Ext 259)

CIRCULAR

MAR. 1967 No. 13

体育白書を中心として - 遊佐清明 -

文部省とは、昭和41年11月に「青少年の健康と体力」と題したいわゆる体育白書を発表したが、測定評価専門分科会では12月に慶応大学において、この白書を中心としての月例研究会が開かれ、出席された諸先生の活発な討議が行なわれた。その詳細についてはサーキュラ12号に掲載されているが、マスコミの取扱いかたについての意見や、体力についての定義についての意見などが論議の中心になり、時間の関係もあって、もういちど白書を中心とした月例研究会を持とうということ、12月の例会を終った。その際に、今回の議題提供者として私が指名されたので、体育白書の中で別分科会に関係のある第1章第1節、第2節を中心として、私の注意をひいた27個所について意見、感想、希望を付記した討議の議題提供資料を作り、1月の研究会に出席されたかたばかりに配布した(プリント残部はあり、選取いただければ送付します)。その要旨は次のとおりである。

白書はだれを対象に書かれているのだろうか。一般人なのか、教育関係者なのか、体育関係者なのか。記述は簡潔、明確という配慮のようにみられるが、専門的な用語には解説を多く加えて、一般の人にも理解できるような配慮もほしい(相関係数についての解説はあっても、身長と体重についての解説はない)。

また簡潔すぎるためか結論が長擧して書かれているように取られる箇所があり、それとは逆に結論をそのままの形でだけ示してあるために、その原因や内容にまで触れたほうがよかったのではないかとと思われる所もあった。さらに、本文中で説明されているものと、巻末の「次の成績」とが一致せず、本文の結論に疑問を感じることもあった。すなわち19頁に「このアメリカ生まれの日本人の児童生徒の体格を比べてみると、わが国の児童生徒の発育は0.5歳ほどの遅れをみせていることがわかる」とあるが、20頁のアメリカ生まれの成績、日本生まれの成績をグラフに書き、その中に、巻末の284頁~286頁の日本生まれの成績(1965年のものと1967年)をプロットしてみると、同じ1965年の日本人の成績が、20頁と巻末とで大きく違い違っていることがわかる。したがって20頁の日本人の成績は、特定のそれも年齢の異なるグループのものではないかと思われる。

なおこのような比較の場合にグラフを示さずに、数字で示してあるのも変ではないか。

身長や体重をそれぞれ独立して扱っているが、身体重やローラー指数での比較までほしかったような気がする。なお、身長、体重などは、主として平均値から性別、年齢別、国別の比較がなされているが、その平均値の背景となる分布にまで問題を発展させねばならないのではないかと。特に外国と比較するときには、その国の民族構成から、必ずしも正規分布とは限らないので、注意する必要がある。

戦後の発育の傾向が、推定学的に身長、体重の本来傾向がつかめるのではなからうか。それを各国と比較して、日本人の生活のありかたなどに触れるとよかつたような感じを受けた。

第2節においては、女子において14~15歳の間の運動能力の伸びの停滞あるいは低下について、その原因の検討が必要ではないか。さらに持久性の成績が年齢とともに低下することについての解析も検討されるべきであろう。年間総走量とみると、走り幅とひは1/10に減少しているが、筋力、走力ともに、この時期では増加が著明であることなどから、問題を追っていくことができそうである。年齢別の各検査項目の成績と有機的に関連させてみることも必要ではなからうか。相関係数について論じている27頁に、対象人数が記載されていないのはおかしい。身長や体重の大きなものが、筋力が大きいのは当然予想されることであるが、ここで帰納的な評価が必要であるような説明もあり、国なりが異なつたように思う。

戦後の推移をみても、昭和25年と昭和40年とを比較してみると、いずれの検査項目においても著しい進歩がみられるが、これと対照的に、一般に運動能力が体格にもなっていないといわれている。したがって、そのような観点に立って、体格と対照した運動能力の論議もほしかった。

そのほか、細かな部分についても問題点を指摘してみたが、白書を通読して、体育関係者の初白書をまじり上げた者事者の苦勞はたいへんのものであつたらうと感ぜられた。このような白書が、ちょうど厚生統計協会が毎年発行されている「国民衛生の動向」のように、年ごとに発表され、その内容をますます充実していくことを願うものである。また白書に要約される前の段階の基礎資料が体育学会などに提示されて、多くの研究者が自由に利用できるように体制が作られ、その結果が次の白書の作成に反映されるようになれば、現状の有機的な分析から将来の体育はますます明確になり、練られた内容ももちろん科学的な、より利用度の高い白書に成長していくのではなからうか。(慶応大学)

コピー2 . 分科会機関誌サーキュラー 13, 1967.3. 1 ページ

になった。このころのサーキュラーからいくつかの話題を拾ってみることにする。

1968年3月発行のサーキュラー 17では永田 晟が「敏捷性テストの検討」について発表している。同年9月開催の日本体育学会第19回大会(東海大)時シンポジウムのテーマは「体力の要因からみたテスト項目について」で波多野、土肥 貢(広島大)、飯塚鉄雄が演者を

勤めた。大会終了後直ちに分科会合宿研究会が東海大学松前会館にて開催され、36人が参加した。このような合宿研修はその後数年間に涉つて学会大会終了後に行うことが定型化した。

1968年11月18日開催の分科会例会では青山昌二(東大・大学院)が「電算機使用のためのデータ・カード作成について」、また翌1969年1月20日開催の分科会例会

では永田 晟が「因子分析法について」発表をした。大型計算機を使用する多変量解析などの統計学的研究活動が開花するに至る、分科会会員の関心と努力の歩みが始まったのである。

1969年9月、日本体育学会第20回大会（広島工大）時に開催のシンポジウム「スキルテストについて」での演者は栗本関夫、中村 誠（都立大）、吉原博之（広島大）、饒村清司（都立向丘高）、唐津邦利、春山国広であった。同日から合宿研修会が広島工大迎賓館で開かれ23人が参加した。スキルテストは引き続きの研究テーマで、翌1970年11月21日には日本体育学会第21回大会（国士舘大）で行われたシンポジウムでは「スキルテストの作成」について演者を調枝孝治（横浜国大）、浅見俊男（東大）、鯛谷 隆（東女体大）として討論を行い、更に合宿研修会を食品衛生センター5階会議室で開催、25人が参加している。

4. その後の事務局（1972-82）

1972年1月27日の月例会にて分科会事務局移転（横浜市大へ）を承認し、世話人代表として小川義雄を指名した。1972年6月のサーキュラー 28（この頃になるとタイプ印刷）には、春山国広「垂直とび測定に関する比較研究」、吉田健一「昔の日本人の体力基準」、島村栄一

（立教大）「一般体育における選択種目から見た体力について」、波多野義郎「柔軟性測定法の検討」等が掲載されている。この頃には合宿例会と称して一泊しての例会が時折行われ、それも三崎の「はまゆう荘」だったりして楽しい思い出になっている。この頃の例会の折りに撮った記念写真があるので写真1として紹介する。場所がはっきりしないが学芸大か東工大のような気がする。

以下詳細は省略して、事務局及び世話人代表の推移を記すことにする。1973年12月のサーキュラー 31によると事務局が都立大へ移転となり、飯塚鉄雄が世話人代表となった。分科会草創期の事務局を担当しながら世話人代表を学界の先輩方に預け、表に出ることを控えてきた飯塚が、この分科会の一時期を名実ともに担うことになった。これがきっかけでこれまで事務局・世話人代表の2つの機能について明確な任期制はなかったが、この頃から1期をほぼ2年とすることが始まった。これにより誰でもが事務局を担当し、その実質責任者が世話人代表になるという平易な「手順」を定着させた訳である。

このルールに従って1976年1月発行のサーキュラー 36には事務局が東工大に移転して石田俊丸が世話人代表となったことが報告されている。以下、1978年には女子美術大に事務局が移転し、角田泰造が世話人代表となった（サーキュラー 39）。同様にして1980年4月から事務局は東女体大へ移転し和泉貞男が世話人代表となった（サーキュラー 41）。そして1982年4月に事務



写真1. 1971年頃の分科会例会時の写真。

前列左から中村(都立大)、金子(電通大)、石田(東工大)、遊佐(横浜市大：物故者)、日丸(都立大：物故者)、田中(学習院高)、後列左から春山(電通大)、波多野(学芸大)、桐生(東工大)、岩崎(都立大)、片尾(横浜市大)、宮崎(学芸大、院)、青山(東大)、田中(学芸大、院)

局が順天堂大に移り、栗本関夫が世話人代表に就任した。
 (栗本は1977年に恩師クラークの不朽の名著「保健・体育への測定の活用」を翻訳出版していた。)

表2 歴代事務局

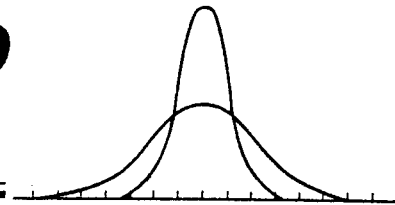
都立大 (1964-67)
学芸大 (1967-72)
横浜市大 (1972-74)
都立大 (1974-76)
東工大 (1976-78)
女子美大 (1978-80)
東女体大 (1980-82)
順天堂大 (1982-84)
学芸大 (1984-88)
東大駒場 (1988-92)
国士舘大 (1992-96)
順天堂大 (1996-00)
東薬大 (2000-)

5. サーキュラーが学術誌へと発展 (1982-)

栗本関夫世話人代表の大きな功績の一つが機関誌サーキュラーの実質的改革であった。それまでのサーキュラーは年に数回発行される、いわゆる手書きのガリ版刷りやタイプ印刷によるニュースレターとして分科会運営・活動を逐一報告する機能を果たしてきた。それはそれで立派に会員にサービスしてきたが、この時から年1回発行の研究論文発表誌へと変身したのである。まず表紙を正規分布曲線の図柄(45の表紙をコピーで紹介する)で飾るカラー印刷とした。そして1982年発行の43は3論文を所収、1983,84年のNos.43,44は各6論文と少しずつ充実拡大していった。以下53までこの表紙デザインが続き、サーキュラーは完全に研究誌として広く認められることになるのである。因みに今回(2001年)

日本体育学会測定評価専門分科会 No. 45, June, 1984

CIRCULAR



目次

新しく事務局をお預りして.....	波多野義郎	1
前世話人のごあいさつ.....	栗本 関夫	2
体育学測定実験におけるマイコンの応用について.....	村松 茂	3
床反力から見た着地緩衝能について.....	福留 彰教	6
レスリング選手の体力.....	多賀 恒雄, 滝山 将剛, 服部 利夫, 笠原 茂	10
発育による皮下脂肪厚の変化		
— 超音波皮脂厚計による測定 —	石田 良恵, 福永 哲夫	12
社会体育現場におけるデンマーク体操の運動強度について.....	山田 俊二	15
遊佐清有先生を悼む.....	片尾 周造	17
事務局日誌		
国際会議のお知らせ		
事務局だより		

の測評学会設立発足であるが、このような発想が可能になったのは実にサーキュラーの充実と、それにより掲載論文の公的認知を目指す要望の高まりがあつたことであつた。そう考えるとサーキュラーの発展は今回の学会誕生への道筋をつける決め手の一つであつたと言って良い。

その後分科会事務局は1984年に学芸大へ移転し、波多野義郎が世話人代表となつた。この年の会員数は163名であつた。一方1985年2月3日には、測評分科会の将来を背負って行くと期待されていた栗本関夫が逝去した（順天堂大 吉儀 宏による追悼文がサーキュラー 46,1985に掲載）。

当時の分科会会員数はしばらく横這い状態が続いていたので、何とか若い会員が入会したり活発に活動してくれないかという課題があつた。そこで考えられたのが測定評価研究奨励金制度である。当時のサーキュラーに紹介されているこの制度によると、35歳以下の会員が刊行した測評研究論文のコピーを送付すれば、規程に照らして1件1万円の奨励金を支給するというものである。各年度に1件程度は該当者がいたもののそれほど大きな成果が上がらぬまま、この試みはその内に立ち消えてしまった（奨励金について言及した最後のサーキュラーは1989年、50であつた）。しかしその後日本体育学会会員は必ずどこかの分科会に所属することを義務づけるようになったため、分科会会員数が飛躍的に増加し（会員数は以前は170名以下だったが、1990年2月16日付けの会員名簿には450名が示されている）、この奨励金制度も暫くは必要度が低下したと考えることができる。

栗本世話人代表の時代にサーキュラーが研究論文誌へと移行発達したことは既に述べたが、その後学芸大（波多野世話人代表；1984 - 88）、東大（青山世話人代表；1988 - 90）、田中世話人代表；1990 - 92）、国士館大（服部世話人代表；1992 - 96）、順天堂大（吉儀世話人代表；1996 - 2000）、東薬大（小清水世話人代表；2000 - ）へと事務局・世話人代表が移りつつ、サーキュラー掲載論文数は順調に増加した。例えば 44（1984）6論文、46（1985）8論文、48（1987）13論文、51（1990）21論文、52（1991）27論文と言う具合である。こうなるとサーキュラー編集そのものが分科会の主要業務となり専心執務者が必要となる。こうして 53（1992）からは青山昌二編集委員長という体制となつた。編集委員長は 54（1993）から岩下 聡（聖マリアンナ医科大）となりこれを機にサーキュラーの表紙デザインを一新し併せてISSN番号を取得・記載するようになった。編集委員長は 58（1997）から大

内哲彦（日体大）が担当し、また以後のサーキュラーも25論文程度の掲載数を維持している。そしてこの研究発表のエネルギーは測評学会機関誌「体育測定評価研究」へと継承されるものと思われるし、それこそが新学会発足の意義・目的と言うものである。学会の生命は研究（科学性に富むべきことは言うまでもないが、できることなら社会のニーズに合致した、人間味が感じられる内容であつて欲しい）発表であるからである。

参考までに歴代世話人代表・事務局一覧を表として掲げる。なお学会大会シンポジウム課題一覧はサーキュラー 50（1989年）青山昌二・太田あや子論文に所収してある。

6. アジア青少年体力研究・地方例会のこと

国際保健体育レクリエーション協議会（International Council for Health, Physical Education and Recreation, ICHPER; 1993年以降はSports and Dance を加えて改名し、ICHPER・SD）のアジア地区理事会では、アジア地域の青少年体力比較研究を推進したいとの意向が1989年頃から起こり、1991年4月にソウルで開かれた同理事会においてこのプロジェクトの実施を決議した。これを受けて日本国内においてこのプロジェクトを実施することにつき、測評分科会世話人会の承認を経て、研究推進組織として「アジア青少年体力比較研究プロジェクト（AYFTJ）チーム」が設けられ、多くの分科会会員の協力を受けて日本国内のデータ収集と分析の作業が行われた（代表：波多野義郎、青山昌二、田中政次、服部利夫、班長：吉儀 宏、岩下 聡、小清水英司、大内哲彦、庶務：山田俊二、柳本有二、太田あや子、小柳津太郎）。その成果として1993年にプロジェクト報告書が刊行され、更に結果の概要はICHPER・SD Journal <日本データ>、国際比較体育・スポーツ学会誌（1998）<国際比較データ>に報告された。

これは国際的なプロジェクトという例であるが、1980年代の後半からいくつかの大学で大学院が整備され、大学院生による研究発表、また1990年頃から外国人留学生（中でも中国人の大学院生）が増えてその人たちによる研究発表等が盛んに行われるようになり、これが上記のようなサーキュラー掲載論文増加傾向に拍車をかけたという面があると思われる。実際、分科会月例会での研究発表が増えて、1回の例会で13演題（1990.7、岸記念体育館）、5演題（1991.4、学芸大）と言うような研究

発表大会形式の例会が開かれ、更に1995年7月1～2日名古屋（12演題，幹事：青山昌二），1996年6月22～23日金沢（12演題，幹事：出村慎一），1997年7月5日仙台（12演題，幹事：菊地裕子）1998年7月25～26日札幌（11演題，幹事：須田 力）のような地方訪問例会が地方会員の発表を賦活しながら開催されたことも，研究発表活性化を促進したと言える。このような動きの背景には共同研究者を多数擁して常にシリーズ発表を手がけた青山昌二の存在が大きかったと考えられる。その青山が1999年7月に病に倒れ，研究活動が休止したことは特に悔やまれるところである。青山はしかしその後療養に励んで（武蔵野女子大からの）停年を記念する測評例会・パーティー（2001.3.16，成城大）には出席し，測評学会副会長にも推挙されている。

7. 「測評とは何か」論

本稿を進めるに当たって分科会機関誌サーキュラーを閲覧したところ，「測評とは何か」と言う議論が繰り返し行われている中で，最も熱心にこの議論を繰り返しているのは飯塚鉄雄（11, 1966. 49, 1988）と青山昌二（50, 1989. 52, 1991. 55, 1994）ではなかったかと考える。飯塚は「測ることへの執念」が測評の原点だと述べ，それを具体化して継承してきたのが世話人代表だったのだという論旨で，測評25年回顧の言葉として，その今後のあり方を示唆している。

青山はいくつかの測評論（波多野義郎：体育の科学，1970及びサーキュラー，1975．小川義雄・遊佐清明：体育の科学，1973．飯塚鉄雄：体育の科学，1973，サーキュラー，1974，1975．栗本関夫：体育の科学，1974．松浦義行：サーキュラー，1975．平田欽一：サーキュラー，1975．中西光雄：サーキュラー，1975．中村栄太郎：体育の科学，1975．和泉貞男：サーキュラー，1980，1982．青山昌二：現代体育・スポーツ体系，1984．青山昌二・太田あや子：「体育・スポーツにおける統計学的研究」，1987．野口義之：サーキュラー，1988）を紹介し「測評分科会是非論」が必要だと言うことを学会大会シンポジウム等で提起・啓蒙すべきだとしている。また1994年の「測評考」では学会大会発表演題の分析を通して，体育の現場を尊重する，体格・体力測定法・大量データ分析法に

主眼，質問紙・面接法も，統計解析手法の開発・検討などが，測評の役割であるべきだとしている。そしてサーキュラーを充実し（例えば年2回），地方例会を年2回などで会員への還元を図ることが大切だとしている。

測評学会への移行が達成されたからと言って，「測評とは何か」との疑問を逃れることが許される訳ではない。そのことを十分踏まえた測評学会でありたいと願うものである。思えば測評分科会の永い歩みは，リーダーや会員たちの「測る」ことを科学しようと言う情熱的追求の営みの歴史であった。新しい学会はこのことの継承と共に新しい課題への発展を心掛けて行くべきだと考える。

参考文献

- 1) 青山昌二(1984) 測定評価研究法.現代体育・スポーツ大系. Vol.1 講談社 pp.171-174.
- 2) 青山昌二・太田あや子(1987) 体育・スポーツにおける統計学的研究. 松田岩男(代表) 体育・スポーツ科学の動向分析と研究課題の体系化に関する研究 第2報, 1987. pp.96-106.
- 3) 小川義雄・遊佐清有(1973) 測定評価研究の動向. 体育の科学 23:516-518.
- 4) 栗本関夫(1974) 第25回日本体育学会大会から一測定評価. 体育の科学 24:775-777.
- 5) 中村栄太郎(1975) 測定評価研究の成果と展望. 体育の科学 25:823-826.
- 6) 日本体育学会測定評価専門分科会機関誌サーキュラー 1(1964)- 61(2000).
- 7) 日本体育学会測定評価専門分科会アジア青少年体力テスト研究調査班(代表:波多野義郎)(1993) アジア青少年健康体力テストプロジェクト(1991-1993) 報告書.
- 8) 波多野義郎(1970) 測定評価の回顧と展望. 体育の科学 20:39-42.
- 9) 飯塚鉄雄(1973) 専門分科会だより. 体育の科学 17:5.
- 10) Hatano Yoshiro(1994) Comparative study of physical fitness of the youth in Japan and China. ICHPER・SD Journal, 30(3):8-15.